

朝鮮通信使と亀井南冥

はじめに

1. 通信使と儒者との交流
 2. 亀井南冥の事績と明和元年の応接
- おわりに

((財)亀陽文庫・能古博物館所蔵)



はじめに

亀井南冥(1743～1814)は、江戸時代後期の福岡藩を代表する儒医学者であるが、藩士抜擢の要因の一つに「朝鮮通信使との応接」があげられる。通信使が訪日して果たした役割には、政治外交の側面と文化交流の側面とが考えられ、沿路諸藩の客館では、朱子学をはじめ先進的な朝鮮文化が学ばれた。本発表では福岡藩に関係する知識人と通信使との交流、特に明和元年(1764)に亀井南冥が応接した事例とともに、彼の生涯について瞥見する。

- ① 日本の朱子学…鎌倉時代五山の禅僧が紹介、室町末期～戦国時代(藤原惺窩、林羅山)～江戸時代に官学へ(林家)
- ② 福岡藩の儒学…前半・貝原益軒(1630～1714)～竹田春庵(竹田家)、後半・亀井南冥(1743～1814)、藩校(天明4・1784年落成)東学修猷館(竹田定良)・西学甘棠館(亀井南冥)

【亀井南冥の先行研究】

- ・ 『儒侠亀井南冥』(高野江鼎湖著、1913年)
- ・ 1950年代後半に九州大学の中国哲学研究室主導のもと、科学研究費による総合研究「九州儒学思想の研究」が発足。南冥担当は荒木見悟氏。
- ・ 『亀井南冥昭陽全集』(1978～80年、葦書房、全八巻九冊)
- ・ 荒木見悟著『亀井南冥亀井昭陽』(1998年、叢書・日本の思想家27、明德出版社)
- ・ 辻本雅史『近世教育思想史の研究～日本における「公教育」思想の源流～』1999年初版、思文閣出版…全6章のうち第三章(「天明・寛政期における徂徠学～亀井南冥の思想と教育～」)と第四章(「亀井南冥の学校論と福岡藩校」)が南冥を事例。
- ・ 井上忠…「亀井南冥と竹田定良～藩校前後における～」(『福岡県史』近世研究編福岡藩(四)、1989年所収)など。
- ・ 早船正夫『儒学者亀井南冥～ここが偉かった』(花乱社、2013年)、河村敬一『亀井南冥小伝』(花乱社、2013年)など。

1. 通信使と儒者との交流(福岡)

- ・ 筆談による交流…科挙制度、朝鮮諺文、冠婚葬祭、医事問答、花鳥、筆墨紙の製法、生活習俗、朱子学(李退溪)、中国(明・清)事情や徐福の渡東など(李元植『朝鮮通信使の研究』1997年、思文閣出版、82頁)。
- ・ 科挙制度の有無…享保期の朝鮮通信使・申維翰「日本には科挙の試験によって人材を登用する法

がなく、官は大小にかかわらずみな世襲であり、優秀な者が世に出ることが稀である」、長崎出身の儒者・岡島冠山（1674～1728）「中国、朝鮮共に科挙制度があり文才の実力を発揮できる。我が国でもこの制度があれば良才が埋没することはない」（東洋文庫『海游録』300頁）。

- ・ 天和年間（1681～83）…貝原益軒、天和2（1682）藩命により甥・好古、門人鶴原時敏（九阜、1666～1710）を伴い接待、朝鮮儒学（李退溪ら）や医学の質問、漢詩の応酬など。
- ・ 正徳年間（1711～16）…竹田春庵（1661～1745）らが応接、薬剤や算学書に関する質問、漢詩の応酬など（『藍島倭韓筆語唱和』）。

◎竹田春庵…京都の人、貝原益軒に就いて修学し、益軒の推薦で三代藩主光之に仕えた後、綱政・宣政・継高にも歴任、著書に『四書小学解』、『筑前孝子良民伝』など。

朝鮮の儒教（儒学）について

- ・ 朱子学以前の儒教（三国時代～高麗期後期）は、支配思想であった仏教と共存、哲学は仏教にゆだね、もっぱら詩文の才を政治・外交で発揮する「文詞・文学儒教」であった。
- ・ 朝鮮儒教の特徴は文臣優位の両班（ヤンバン）の儒教である。彼らは初等教育の書堂、ソウルでは四学、地方では郷校を経て、最高学府の成均館に進み科挙試験を受験、その後文臣の地位を独占。
- ・ 朝鮮の儒教は「朱子学一尊」、中央政府が安定期を迎えると、官を辞して地方に下る「士林」という在野勢力が形成される。吉再（1353～1419、嶺南学統）の学統から李退溪（1501～70）らが生まれた。
- ・ 官吏のポストをめぐり、学統の対立（党争）が必至。例えば、東人（主に李退溪派）と西人（主に李栗谷（1536～84）派）の対立など（『世界大百科事典』「儒教」）。

2. 亀井南冥の事績と明和元年の応接

亀井南冥（諱は魯、字は道載、通称は主水、南冥はその号）は寛保三年（1743）父・聴因（古医方派の医者）、母・徳の長子として、筑前国早良郡姪浜（現福岡市西区姪浜）にて出生。その後、肥前蓮池の儒僧・大潮（1676～1768）、大坂の儒医学者・永富独嘯庵（1732～66）らに師事し、帰国後父と共に自宅（現福岡市中央区唐人町）敷地内にて開業、同時に儒学講義所（蜚英館、のち南冥堂）を開く。この「教育者」としての活動、加えて、朝鮮通信使応接（明和元年・1764）の際の漢詩文の才能などにより、安永七年（1778）、「儒医兼帯」として福岡藩（七代目・黒田治之）に召し抱えられ、同藩藩校（東学・修猷館及び西学・甘棠館）設立に尽力。しかし、寛政四年（1792）甘棠館祭主の地位を追われ、文化十一年（1814）に生涯を閉じた。著作には『南游紀行』（安永三・1774年）、「金印弁」（天明四・1748年）、『論語語由』（寛政五・1793年）など、門人には江上蒼洲（1758～1820）、原古処（1767～1827）、青木興勝（1762～1812）など、長男昭陽（1773～1836）の門人には、廣瀬淡窓（1782～1856）・旭荘（1807～63）などがある。

南冥の生涯のなかで画期となるのが福岡藩に出仕した時であることは言を俟たない。一介の町医者から抜擢された要因の一つとして、明和元年の通信使応接により漢学の実力を認められたことが挙げられる。しかしながら、応接に臨むにあたりどのような経緯で「儒医兼帯」として出仕したのかなど不明瞭な部分が多い。当時福岡藩儒であった井土廬庵（廬垌、1707～70）の仮の門弟となり応接に加わったともいわれているが¹、今後の検証が必要であろう。

¹ 岡村繁『『泱々余響』解説』（『亀井南冥昭陽全集 第一巻』葦書房、1978年、所収）、以下同書の解説はこれによる。

明和年間の朝鮮通信使概要

- ・ 癸未年（1763）8月3日出発→8月22日釜山（陸路）→10月6日釜山浦出船～壱岐・藍島・下関・鞆津・兵庫をへて翌甲申年（1764）1月20日大坂入港～浪華・京都→2月16日江戸到着、2月27日将軍（家治）謁見、3月6日曲馬術弓術の上覧、3月7日将軍の返書授受、3月11日江戸発→京都・4月5日大坂、4月7日都訓導崔天宗刺殺事件（処理のため滞留）、5月8日大阪港出船～対馬～6月22日釜山帰着（李元植『朝鮮通信使の研究』326～327頁）。
- ・ 通信使が藍島に寄泊した期間は、12月3日～26日（のべ23日間）、筑前の儒者と通信使（主に南玉）との唱和は計5回（同月8・10・12・14・18日）。
- ・ 明和年間（1764～1771）の通信使…正使・趙曦、副使・李仁培、従事官・金相翊ほか総勢480余名。
- ・ 南冥が藩儒に従って藍島に渡ったのは最初の2回のみ、その後は単独で面会（日時不明）。

『決々余響』について

- ・ 「決々」…『春秋左氏伝』襄公二十九年「美哉、泱泱乎。大風也哉。表東海者、其大公乎。（美なるかな、泱泱乎たり。大風なるかな。東海に表たる者は、其れ大公か。）」一呉の季札（政治家）が東の斉国の歌を賞賛した言葉。
- ・ 全70丁（上下二巻）の冊子の内容は、南冥と通信使たちとの唱和や筆談をおおむね日記風に詳述したもの。
- ・ 南冥と詩文の応酬にあたった人物は、南玉（随従学士。字時韞、号秋月、製述官大学士）、成大中（正使書記。字士執、号龍淵）、元重挙（副使書記。字士才、号玄川）、金仁謙（従事官書記。字士安、号退石）、大医官・李佐国（字聖甫、号慕菴）、押者判事・李彦瑱（字虞裳、号曇寰）ら。
- ・ 漢詩の唱和は五言及び七言の絶句・律詩、詩経・楚辞体など。

【「筆語」の内容】

- ・ （李）慕菴「日本ではどのような医学が行われているのか」—南冥「『復古医方』というものがある。（張）仲景の『傷寒雑病論』を亀鑑とする。治療には専ら（癸）汗・吐（瀉）・下（痢）の三方を用いる。この医術の流派や書籍は多数ある。」
- ・ （李）虞裳「天下の奇書や佳士、名山水などが知りたい」—南冥「大坂に（永富）独嘯庵、島原に長沢楽浪という豪傑がいる。特に独嘯庵の『囊語』、楽浪の『王道内編』は卓越した著作である。また（学問・詩文では）、（荻生）徂徠、（伊藤）仁斎、（服部）南郭、（太宰）信陽などが優れており、医学書では、（山脇）東洋の『医則』や『蔵志』、（香川）修庵の『菓選』、独嘯庵の『吐方考』、『漫遊雑記』など、みなすばらしい。名所は貴船が通航する折に見ることができるが、琵琶湖や厳島、松島などが有名である。ただ私は、松島はまだ見たことがない。」
- ・ （南）秋月「赤間より東方で優れた文学者を録出（書き出）してほしい」—南冥「長門に瀧弥八（鶴台）、大坂に有岡忠蔵（未詳）・（細）合麗王・葛子琴、西京には清（田）君錦・岡白駒・芥（川）元章、彦根には龍草廬がいる。江戸に関しては未詳である。恐らく弥八が巨頭であろう。」
- ・ （南）秋月「（永富）独嘯庵と弥八ではどちらが優れているか？」～「独嘯庵先生は人格者であり、弥八は学問に秀でてゐる。独嘯庵先生は『天下之奇士』である。」

『亀井南冥昭陽全集第一巻』506～509頁

近世思想概観

・徳川家康が官学として朱子学を重用

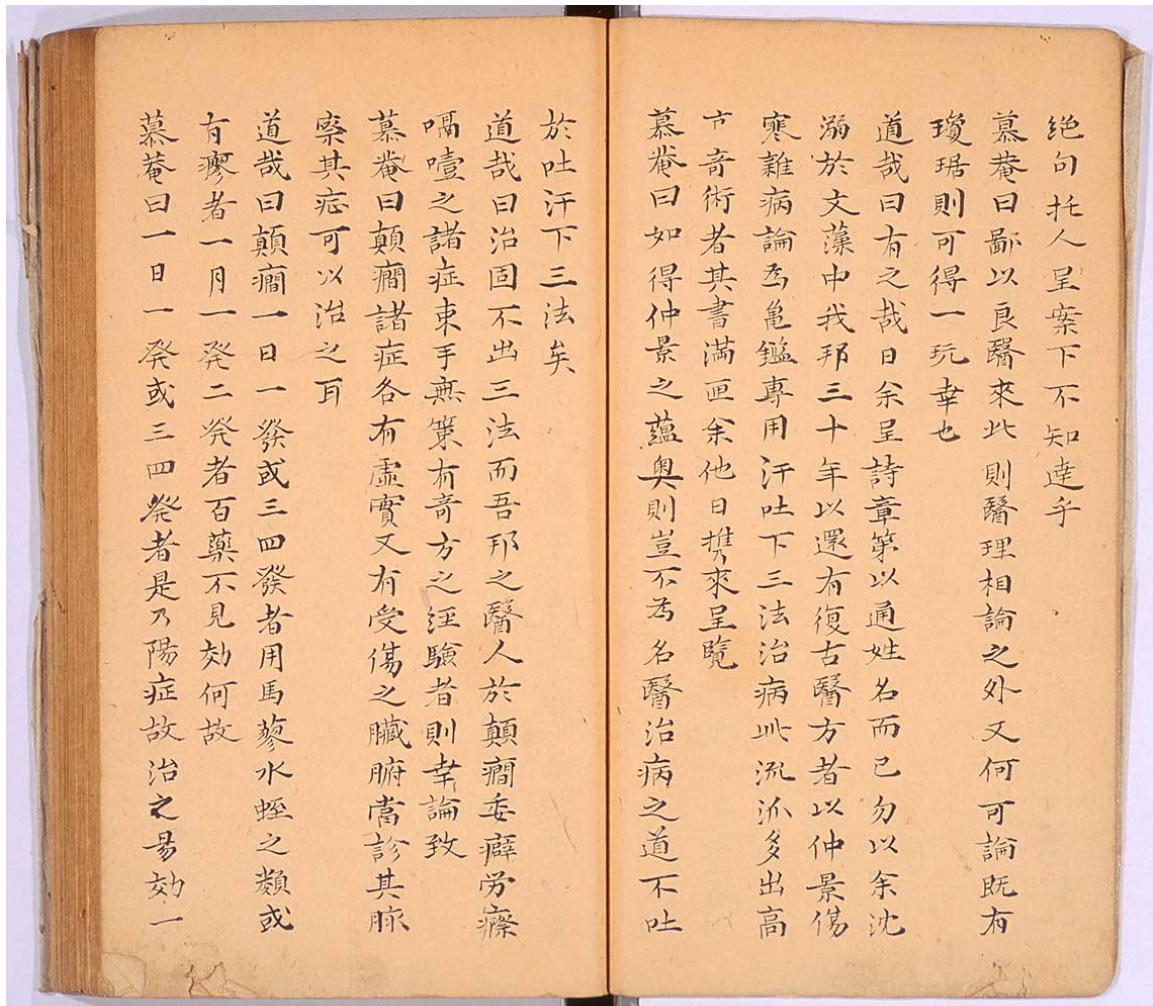
儒学：藤原惺窩（1561～1619）・林羅山（1583～1657）→林家（世襲）

医学：李（東垣）・朱（丹溪）医学（「後世派」）→曲直瀬家（江戸初期）、多紀家（江戸中期頃）

・儒学の復古運動（医学も！）17世紀中期ころ～

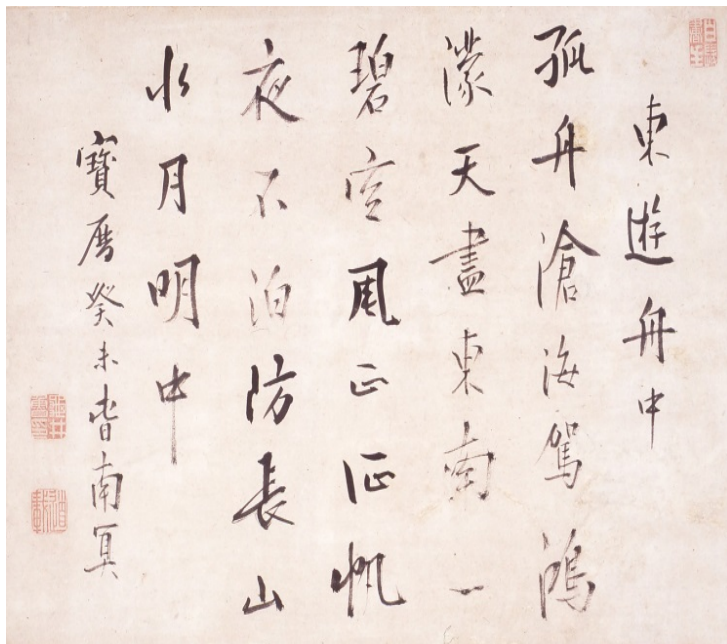
儒学：伊藤仁斎（1627～1705）・荻生徂徠（1666～1728）・山鹿素行（1622～85）「古学派」

医学：名古屋玄医（1628～96）・後藤艮山（1659～1733）・香川修庵（1683～1755）「古医方派」



Copyright 2003, Kyoto University Library

『決々余響』（京都大学電子図書館）



(財) 龜陽文庫・能古博物館所蔵

東遊舟中
孤舟滄海駕鴻濛、天盡東南一碧空、風正征帆夜不泊、防長山水月明中
寶曆癸未春 南冥印

(読み下し) 案
東遊の舟中
孤舟 滄海鴻濛に駕し
天は尽くす東南一碧の空
風は正しく征帆夜も不泊
防長の山水 月明の中
宝曆癸未の春 南冥

補論 (久留米大学所蔵有馬織部書簡)

(端裏) 四月六日便 同月廿三日相達
返事済

二月廿三日三月六等之返書遂ニ相達令拝誦候先以愈無別儀在勤ニ而致□心候然し先頃ハ少々咽氣之由如何ト存候へ共爾来出勤ニも相成候趣ニ而令大慶候爰元皆無異義候お近事も四月中引越之筈候処彼方差支有之六月初旬ト申儀ニ成却而宜敷候幸節九八詮議于今手入心配察入候然し最早御所置も付候半ト存申候清助も咄有之著作之随筆も被為見感心いたし候由左様候半ト存候朽木杯へも追々ハ御出候様申候由如何様共其表模様次第御考ニ不可過ト存候且又先頃ハ御合力金拝受之由珍重存候此地萬事依旧候額之馬去年来乗祓候間甚悪敷相成とても行々宜ケ間敷候間引替候様六郎進メ甚残念ニも存候何卒乘直し等頼候へ共六郎受合兼候間左様ニ而ハとても手前ニ而之乗ハ出来兼無抛引替候此節之馬ハ矢張月毛ニ而四才前之馬同様之恰好ニハ候へ共余程劣り候志かしさら付候間のり向ハ宜敷候去月遠乗田主丸邊迄参り随分相応ニハ有之候六郎も大小性格奥詰被 仰付有難かり候様子ニ候且又先月廿七日久し振而石崎圓勝寺へ詩會相催石梁始め例之社中終日勝遊ニ御座候主僧御存之詩僧ニ而作も有之慰懸御目候南冥先生之儀定而箕嶺咄方御承知可有之氣之毒千万之臨終御座候狂態之極ト相聞へ申候餘事期再鴻候 謹言
(文化十一年か) 四月六日 有馬織部照長
吉田源太左衛門殿
二白央書状令落手則及返報候且箕嶺へ一封差出候間両書共ニ宜敷頼入候以上

※ 有馬織部^{てるひさ}照長（1781～1851）…号は息焉、代々国老で本姓は吉田氏、4000石。寛政十一年、八代目・有馬頼貴の娘を妻とし、翌年国老職。頼貴・頼徳・頼永・頼成の間を歴任。漢学は梯箕嶺・樺島石梁に師事、江戸在勤中は菅茶山などと交友を結び、当時「海内三賢太夫」と称された。

『久留米人物誌』

※ 廣瀬淡窓『懐旧楼筆記』卷十七

…南溟先生罪ヲ得テ蟄居シ玉ヒシヨリ。此ニ至ツテ二十餘年。心中憤懣ニ堪ヘス。終ニ狂疾ヲ發セラレタリ。予カ蟄ニ在リシ時マテハ。唯酒ニ耽リ。佯狂ノ體ニ類セシカ 追々ト性理乖錯スルニ至レリ。但事ニヨリ。時ニヨリテハ。常人ニカハラサルコトモアリシナリ。一旦ハ籠居セラレシカ。近來ハ頗ル穩ニシテ起居モ心ニマカセオキタリ。先生ノ隱宅、本宅ノ隣ニアリ 三月二日 家人糕ヲ搗クニヨリテ。炭火多カリシヲ。先生ノ衾爐ノ裏ニ入レオキ。其侍婢モ暫時本宅ニ行キタリ。而ルニ人アツテ曰ハク。隱宅ヨリ煙多ク出ツルト。昭陽夫妻走り行キテ見玉ヒシニ。滿室ニ火起レリ。昭陽煙火ヲ犯シテ。先生ノ居間ニ至ラレシニ。更ニ人ヲ見ズ。聲ヲアゲテ呼ブニ答フル者ナシ。時ニ一人曰ハク。老先生ハ。先刻外ニ出玉ヘリト。昭陽略心ヲ安ンシ。マツ人ヲ走ラシメテ。其居所ヲ尋ネ。其身ハ火ヲ打滅サレタリ。夫ヨリ墻壁ノ燒倒レタルヲカ、ケノケシニ。墻下ニ先生ウツブシニ臥セラレタリ。其身全ウシテ損スルコトナシ。息既ニ斷エタリ。火ノオコリシ所以。知リカタシ。自ラ火ヲ放タレシヤ。自然ニ起リシヤ。自ラ火ニ投セラレシヤ。將タ出テントシテ。及ハサリシヤ。其説得難シ。其宅ハ四面皆空地ニシテ。火ニトリコメラルヘキ様ナシ。然レハ。自ラナセルニ近シト。人云ヘリ。

おわりに

- ・ 通信使応接の唱和集は200冊以上（京都大学『通信使関係資料目録』）
- ・ 南冥が応接に抜擢された経緯
- ・ 永富独嘯庵を賞賛した真意
- ・ オランダ流医学に関する朝鮮側の受容可否

など

【その他参考文献】

- ・ 大庭卓也「福岡藩竹田春庵と朝鮮通信使」（『語文研究』九十三号、2002年、所収）
- ・ 大庭卓也「西日本に残される朝鮮通信使自筆資料」（『国文学研究資料館紀要』第三二号 文学研究篇、2006年、所収）
- ・ 『福岡県史 通史編福岡藩文化（下）』（第5章 文学「韓使応酬」高橋昌彦）西日本文化協会、1994年
- ・ 河宇鳳『朝鮮実学者の見た近世日本』ペリかん社、2001年
- ・ 『玄界灘の江戸時代 軍船・廻船・異国船（平成9年度福岡市博物館特別企画展）』福岡市博物館、1997年